

登山と河川

— 自然保護への疑問 —



一 原 有 徳

川は人類にとって自然が与えてくれた道である。原住民は元より、松浦武四郎のそのむかし、探検は川からはじめられた。現代の登山はスポーツの一環とされるが、はじめは未知への魅力を秘めた探検的要素の方が強く、ほとんどの初登頂の山は川からであった。高沢光雄氏の労作「北海道の登山史」（北の山脈連載）を改めてみて、一層その感を深くする。

ここ数年、小樽ではベテガリ岳の大衆登山が行われている。土曜日の午後に出て、日曜日に帰ってくる日程である。私のベテガリ岳は鳧舞川から源頭を越えイベツの沢ピリガイ山ベツピリガイと五つの源流から源流を辿り国境線に出て六日目の登頂で昔日の感がある。半世紀をかけて登った私の過去の山、そこには川の溯行が多かった。樹を倒して架橋に苦労した涸、泳いで通過したゴルジュ、進退きわまつた崖のトラバース、石のきれいな川原でのキャンプ、川空を狭めた原生林と、溯行の記憶の思い出はつきない。

いまそれらの川に沿って、大方は道がつけられている。昨年九月、イドンナップ岳にいったが、シュンベツ川の右岸を奥の奥まで車でゆき、渡渉もなく登られた。そしてコイボクシビチャリ川も奥まで道がある。聞いて、シカシナイとか大山とか、未知

の山にも登られると、可能性に心ふくらませたのであった。

正直いって私はむかしから道路ができる、可能性の山が生まれるよろこびがあった。石狩岳に音更川の溯行を覚悟していたのに、三俣まで鉄道がついて飲んだむかしからである。いへば探検の概念には未知を開く内包があるはずで、登山として変りがなく、自然保護とは矛盾要素が内在する。

ここで思うは、開発か保護か絶対的見方が強いことである。道路についてみるとその先入意識なく見るならば、線と色彩から自然とは調和し、意外と美しいものである。要は調和の問題であり、また保護すべきは、単なる自然でなく自然美ではないだろうか。

川のもつ自然美、それは樹林が第一である。私の記憶の中で、その代表的破壊の実例をあげ専門家に聞きたい。ニシオマナイを溯行した三十八年のことであるがベツピリガイ乗越の二股一帯は見事な日高五葉の純林であった。それが六年後には車道がのび、一本残らず伐採され、縮模様の植林の跡と役所の建物があった。林務部広報誌の「林」にベテガリ岳に日高五葉発見の記事があったが、学者にとってすぐ南のこの純林は、どう見ていたのか、また日高山系の針葉樹は、大方伐採され、いまは沙流川源

流地帯を残すのみとなった。これとて、ここ数年の運命にある。森林伐採に声がないのは、植林すればよく、道路もそのためならよいということなのだろうか。植林と自然林の写真をかかげアンケートしたら、植林が美しいとの答えが多かったことがあるが、近景の写真で子供だましに等しい。樹の育ったときの遠景を想像してみよう。そこには継ぎばぎの着物に似た山腹がいたるところに展開するのはたしかである。

高所だけでも道路反対があるのはよろこばしい。暗い谷間から開放された源頭の湿原や、高原の植物群は私も守ってほしいと思う。上流以下を保護する山とてなくなりたいま、せめて源流地帯の保護に力を集中してほしい。

中央高地のクワウンナイに人を寄せているが、まだ未知の自然が残されている源流はいくらかもありまた源流をめざす中には、最近ここ十年の間に中央高地ではニセイノシキオマツ川、日高では無名沢の源頭。道南においても、積丹の川、茂津多岬付近の須築川、支笏湖畔恵庭岳の滝沢など小さな未知のむずかしい源頭を求めている傾向も見がせない。ここにはよりスポーツ的な内容を持ち、自然保護などとは無縁な登行が行われているともいえる。

（小樽山岳会顧問）